

乾燥前処理としての葉枯らし法の検討

河崎弥生・見尾貞治・小玉泰義

1. はじめに

葉枯らしとは、伐倒した樹木を枝葉を付けたままの状態林地に一定期間放置し、木材の含水率の低下を促すとともに、心材色もより良くすることを目的として行われる。奈良県吉野などの林業先進地では、古くから広く行われている方法である。乾燥材の供給が強く求められるようになった最近の木材業界において、乾燥の前処理法として改めて注目を浴びている。

今回は、葉枯らし林分から持ち込まれた試料を解析し、その効果について若干の考察を試みた。

第1表 調査試料の概要

| 調 査 試 料 | | | | | 葉枯らし条件 | |
|---------|-----|-----------|-------|----|--------|------|
| 記号 | 樹種 | 樹齡 (年) | 調査個体数 | | 時期 | 期間 |
| | | | 葉枯し材 | 生材 | | |
| A | スギ | 54 | 2 | 1 | 夏 | 約90日 |
| B | スギ | 71 | 3 | 3 | 夏 | 約70日 |
| C | ヒノキ | 50 | 3 | 3 | 冬 | 約60日 |

2. 方法

1) 調査試料：概要は第1表のとおり。

2) 方法

①円板採取：円板採取位置は、原則として、根元，4m，8mの3カ所。

②試片：含水率測定用ブロック試片は、各円板につき、心材及び辺材毎に2個採取した。

③水分測定：JIS Z2102 に準拠して、絶乾法で含水率を求めた。

第2表 葉枯らし材の含水率

| 試料 | 平均含水率 (%) | | |
|----|-----------|-------|------|
| | 生材 | 葉枯らし材 | 差* |
| A | 131.4 | 79.1 | 52.3 |
| B | 171.9 | 141.6 | 30.3 |
| C | 91.0 | 82.4 | 8.6 |

3. 結果と考察

第2表に示した測定結果を要約すると、

①スギの場合

夏期に約3ヶ月の葉枯らしを行うことにより、30~50%の含水率の低下が期待される。ただし、

試料Bのように、初期含水率が高く、試験地の状況や伐倒木の重なりなどの葉枯らしの条件・方法によっては、夏期・3ヶ月の葉枯らしでも十分であるとはいえない場合もある。

②ヒノキの場合

今回、含水率の低下は8%程度にとどまり、良好な結果は得られていない。この理由として、葉枯らしの期間が約2ヶ月と短かったことと、時期が冬期であったことが挙げられよう。

現在、葉枯らしの方法や効果については議論も多々あり、立地条件等を加味した検討を今後も進める予定である。

*) 葉枯らしにより減少した含水率